

ヤコブ書の修辞学的分析*

山 田 耕 太

1. はじめに

筆者は、10年前からパウロ書簡の修辞学的分析に取り組み日本新約学会で研究発表をしてきた。¹ だが最近では、パウロ書簡とその影響下にある書簡とは異なり、ヘレニズム・ユダヤ人キリスト教の影響のもとにある書簡の修辞学的研究に携わるためにヘレニズム・ユダヤ教を代表するフィロン研究のグランドワークを行なって、日本新約学会や日本キリスト教学会などで発表してきた。² 本稿では、フィロン研究の後に昨年日本新約学会で発表した「ヘブライ書の修辞学的分析」³ に続いて、ヤコブ書の修辞学的分析を試みたい。

2. 研究史的瞥見

(1) ジャンル批評

ヤコブ書は、パウロを再発見した宗教改革者ルターが「藁の書」と呼んで以来、パウロ神学との関係が議論されてきた。また19世紀以来その著作年代と関連して著者が「主の兄弟ヤコブ」であるのか否かが論じられてきた。さらに、手紙の「前書き」(1:1)はあるが「後書き」がないので、それが「書簡」であるという従来の理解を問い質して、文学ジャンルが何であるかが論じられてきた。すなわち、主として著者問題、文学類型(文学ジャンル)、パウロ神学との関係という3点において「ヤコブ書の謎」⁴を解き明かすことが試みられてきた。

ヤコブ書の文学類型に関して、20世紀のヤコブ書の研究に決定的な影響を与えたのは、M.ディベリウスの註解書である。ディベリウスはヤコブ書の書簡的前書き(1:1)を除くと、その文学類型は様式史的に見て、「パレネーシス」(paraenesis、訓戒)であり、それは旧約外典のトビト書の一部(4:5-19, 12:6-10)、パウロ書簡の後半やヘブライ書13章の勧告の部分、使徒教父文書のディダケー、バルナバ書、ヘルマスの牧者の一部にも見られるとした。さらにそれはヘレニズム時代の『偽ポリキデス書』『偽メナンドロス書』、旧約偽典の『12族長の遺訓』、ラビ文献の『ピルケ・アボス』にも見られる文学類型であると分析した。そこから、ヤコブ書は8つの段落に分かれるが、それらは一連のグループの言葉と一連の

言葉が集められた「互いに関連のない言葉の集まり」であり、そこには「思想的な一貫性がない」とした。⁵ しかし、現在では「パレネーシス」は、文学類型ないしは様式の問題ではなく、むしろ文体の問題であると理解され、またヤコブ書全体は互いに関連のない言葉を繋いだものではなく、互いに密接に関連した一つのまとまりのある文書であると理解されている。

その後、ディベリウス説を発展させて、ヤコブ書は「命の冠」(1:12, cf.4:14)に至る道と「死」(1:15, 5:20)に至る「迷いの道」(5:20)に見られるように、キリスト教の入門者のための「原始キリスト教のカテキズム(教理問答)」⁶ ないしは「改宗者のカテキズム」⁷ であるとも一部では提案され、その影響を受けて「パレネーシス」と折衷した「パレネーゼ的ディダケー」⁸ とも指摘されたが、ヤコブ書全体はディダケー(1-6章)やバルナバ書(18-20章)の「二つの道」とは内容と文体が異なり「カテキズム」ではない。このような理解は今日では廃れている。

さらに、これらと関連して、ヤコブ書は「キリスト教的倫理のハンドブック」⁹ ないしは「パレネーゼ的意図のあるトラクト」¹⁰ であるとも提案されたが、ヤコブ書はキリスト教へ倫理の「ハンドブック」でも神学的な「トラクト」でもなく、ディアスポラのユダヤ人キリスト教徒が直面した問題に対する助言の文書である。

1990年代以降現在に至るまで、一方では、ヤコブ書が「書簡」であると改めて主張されている。とりわけ「ヤコブから離散している12部族の人々へ」というヤコブ書の前書き(1:1)から、ヤコブ書の文学類型は、エルサレムの権威ある個人や共同体から離散(ディアスポラ)のユダヤ人共同体に宛てられた「ディアスポラ書簡」¹¹ という理解が広まっている。それは、旧約聖書のエレミヤ書(29:1-23)、旧約外典の第二マカベヤ書(1:1-9, 1:10-2:18)やエレミヤの手紙、旧約偽典のシリア語バルク黙示録(78-86章)、使徒言行録の「使徒教令」(15:23-29)、バビロニア・タルムード『サンヘドリン』(11b)、などに見られる文学類型である。また、その内容において従来から旧約聖書やユダヤ教の知恵文学との連続性が指摘されてきたが、単に「知恵的訓戒・教示の書簡」とも位置付けられている。¹²

他方では、手紙の前書き(1:1)を除いて、ヤコブ書は「説教」¹³ であると理解する立場が拮抗している。19世紀末から20世紀初頭にかけて、新約聖書の文体に関して議論の相手の問を想定してそれに答えるヘレニズム文学の「ディアトリベー」¹⁴ という文体との関係が指摘され、ヤコブ書

の文体は「ディアトリベー」¹⁵ であることが指摘されていた。R.ブルトマンはさらに「ディアトリベー」がパウロ書簡の文体の特徴であることを指摘し、¹⁶ H.ティエンはこれを発展させて、フィロンの比喩的な創世記注解や第四マカベヤ書、ヤコブ書やヘブライ書、第一クレメンス書〔現在は、第二クレメンス書が説教であると見做す〕やバルナバ書などを「説教」と見做して、「ディアトリベー」・七十人訳聖書の引用・「パレネーゼ」などによるヘレニズム・ユダヤ教の会堂で用いられた「説教」の文体の特徴を指摘した。¹⁷ それ以後、B.レイクの注解書¹⁸ などでもヤコブ書が「説教」として理解されてきたが、現在では修辞学的批評との関連で再評価されている。¹⁹

(2) 修辞学的批評²⁰

現代にヤコブ書の修辞学的分析を始めたのは、1978年のW.ヴェルナーの論文であった。²¹ ヴェルナーによると、ヤコブ書は序論（1:1-12）に対応する結論（5:7-20）、その間に本論（1:13-5:6）置かれ、それは否定的議論と肯定的議論から成る6つの部分に分かれ、その詳細な構造は、前書きを除くと以下の5つの部分で構成されていると分析した。

1:1	前書き	(praescriptio)
1:2-4	序論	(exordium)
1:5-11	陳述	(narratio)
1:12	命題	(propositio)
1:13-5:6	議論	(argumentatio)
① 1:13-27		(1:13-16, 1:17-27)
② 2:1-13		(2:1-7, 2:8-13)
③ 2:14-26		(2:14-17, 2:18-26)
④ 3:1-18		(3:1-12, 3:13-18)
⑤ 4:1-12		(4:1-4, 4:5-12)
⑥ 4:13-5:6		(4:13-15, 5:1-6)
5:7-20	結論	(peroratio, 5:7-8, 9-12, 13-20)

それに対して、E.バースラントは1988年の論文で導入部（1章）をヴェルナーとは違った視点で分析し、また本論自体が二部構成であり（1:19-3:12, 3:13-5:6）、自説を肯定的に主張する論証と論敵を否定的に論駁する反論で対比的に構成されていると分析した。²²

1:1	前書き	(praescriptio)
1:2-15	序論	(exordium)

1:16-18	移 行	(transitus)
1:19-27	第一命題	(propositio prima)
2:1-3:12	論 証	(confirmatio)
3:13-18	第二命題	(propositio secunda)
4:1-5:6	反 論	(confutatio)
5:7-20	結 論	(peroratio)

J.H.エリオットはヴェルナーの修辞学的分析に基づきつつ、序論・陳述・命題・結論を修正し、同時に「汚れ」と「清め」に関する社会科学的分析を行った1993年の論文では、次のようにヤコブ書の本論は否定的議論と肯定的議論で成り立つ7つの部分に分けられると分析した。²³

1:1	前 書 き	(praescriptio)
1:2-12	序 論	(exordium, 1:2-4, 5-8, 9-11, 12)
1:13-5:12	議 論	(argumentatio)
① 1:13-27		(1:13-16, 17-27)
② 2:1-13		(2:1-7, 8-13)
③ 2:14-26		(2:14-17, 18-26)
④ 3:1-18		(3:1-12, 13-18)
⑤ 4:1-12		(4:1-4, 4:5-12)
⑥ 4:13-5:11		(5:1-6, 7-11)
⑦ 5:12		(5:12a, 12b)
5:13-20	結 論	(peroratio)

L.トゥーレンは、ヴェルナーの修辞学的分析に基づきつつ、バースラントの「第一命題」を採用して、以下のように修正して分析した。²⁴

1:1-18	序 論	(exordium; 1:1-4, 5-11, 12-18)
1:19-27	命 題	(propositio; 1:19-21a, 21b-25, 26-27)
2:1-5:6	議 論	(argumentatio)
① 2:1-26		(2:1-7, 8-13, 14-26)
② 3:1-4:12		(3:1-12, 13-18, 4:1-12)
③ 4:13-5:6		
5:7-20	結 論	(peroratio; 5:7-11, 12-20)

以上の分析から明らかなように、修辞学的分析で問題なのは、ヤコブ書1章をどのように位置づけるかである。とりわけ序論の範囲がどこまでであり、1章後半が命題であるのか、議論の一部であるのかである。また、本論の議論の展開の構成である。²⁵

3. 修辞学的状況

ヤコブ書は「離散している十二部族」(1:1) というパレスティナ以外のユダヤ人キリスト教徒に宛てて書かれている。彼らは一般的に言って「試練・誘惑」(1:2, 12 ; 1:13, 14) の問題に遭遇している。「試練・誘惑」とは具体的に、第一に、「信仰」(1:3, 6) と「疑い」(cf. 「不信仰な者」 4:4) という「二心」(1:8, 4:8, cf. 「心を欺く者」 1:22, 26) の問題であった。「疑い」は「上からの」(1:17, 3:15) 「知恵」(1:5, 3:13, 15, 17) を欠くことによるが、また人間の「欲望」(1:14-15) に起因した問題であった。それは「舌(言葉)」(1:26) の問題、すなわち「舌を制御できない」(1:26, 3:1-12) 「大言壮語」(3:5) 「自慢」「誇り」(3:14, 4:16) や「悪口」(4:11; cf. 「非難する」 1:5) という問題と密接に関係している。これらの問題、とりわけ言葉で相手を「裁く」(4:11-12) という問題は、さらに具体的な状況として共同体内部での「争い」や「戦い」という問題に直面していた(4:1-2)。第二に、以上の問題と関連して、「富んでいる人」(1:10, 11, 2: 6, 5:1) と「貧しい人」(1:9; 2:2, 3, 5, 6) の問題、すなわち「富んでいる人」が「貧しい人」を「差別する」(2:4) という「行為」の問題に直面していた。このような「信仰」と「行為」において「試練・誘惑」に陥った人々は最後に「真理から迷い出た者」(5:19-20) と呼ばれる。

以上のような問題に直面したディアスポラのユダヤ人キリスト教の共同体に対して、「私の兄弟たち」²⁶ 「私の愛する兄弟たち」²⁷ 「兄弟たち」²⁸ と呼び掛け、「よく聞きなさい」(2:5, 4:13, 5:1) 「聞くのに早く…心に植えつけら得た御言葉を受け入れなさい」(1:19, 21) 「あなたがたはヨブの忍耐について聞き」(5:11) と耳を傾けて聞くことを強調する。続いて、「御言葉を行なう人になりなさい。聞くだけで終わる者になってはいけません」(1:22) 「聞いて忘れてしまう人ではなく、行なう人です」(1:25) と聞くだけでなく、聞いたことを実行するように勧告する。また、議論では修辞疑問から始めて²⁹ それに答え、「もし(誰かが)…ならば」³⁰ という仮定を想定して議論し、「誰かが」³¹ と相手を想定して議論するディアトリベーのスタイルを終始一貫して用い、またしばしば議論の中で二人称単数主格や二人称複数主格を用いる。³² これらの語法や用法から、ヤコブ書1章1節の前書きに続く1章2節以下の全体は、語られることを前提にした説教と見做すことができる。

4. ヤコブ書の修辞学的構造

ヤコブ書は修辞学的分析によると以下のような構造をしている。

- A. 1:1 前書き (praescriptio)
- B. 1:2-11 序論 (exordium)
- C. 1:12-27 命題 (propositio)
- D. 2:1-26 第一議論 (argumentatio prima)
- E. 3:1-4:2 第二議論 (argumentatio secunda)
- 3:13-18 移行 (transitio)
- F. 4:13-5:6 第一議論再開 (repetitio argumentatio prima)
- G. 5:7-20 結論 (peroratio)

以下ではそれを詳細に論じる。

A. 前書き (praescriptio; 1:1)

前書きは「神と主イエス・キリストの僕ヤコブ」からディアスポラのユダヤ人キリスト教徒を意味する「離散している十二部族の人々」³³ に対して宛てられ、ヘレニズム時代のパピルス書簡で一般的に見られる「挨拶する」(chairein) という言葉で始められる。

B. 序論 (exordium; 1:2-11)

前書きの段落の最後の言葉の「挨拶する」(chairein) と序論の段落の冒頭の言葉「(すべての) 喜び」([pasan] charan) は、文末と文頭に似た音の言葉を連ねた「類音」(paronomasia; annominatio)³⁴ を用いて、連続性を持たせる。

「序論」では、一般的に言って「好意的で、注意深く、受け入れる」³⁵ 準備をするが、ここでは、議論の「予めの要約」(proekthesis)³⁶ を述べる。すなわち、「さまざまな種類の」(poikilois) 「試み」(peirasmois) を「(人生の歩みの中で) 経験した」(peripesete) 時に、と「類音」用い、その時にこそ「喜べ」と逆説的に勧める (1:2-3)。³⁷ 次に、その理由として (de)、「信仰の試練」によって「忍耐」が生じ、「忍耐」は「完全な行ない」³⁸ を生じる³⁹ と文末と文頭で同じ言葉を繰り返す「前辞反復」(anadiplosis; reduplicatio)⁴⁰ を用いて、「忍耐」⁴¹ の役割について注目させ、キリスト教徒の目標が「欠けた所がない成人 (完全な者) で円満な者」⁴² となることを前もって示す (1:4)。

それに「対置」(antitheton; antithesis)⁴³ して、「もしあなたがたの誰かが」と仮定法を用いて議論の相手を想定して、「知恵」(sophia)

に欠けるならば「神から求めよ、信仰によって求めよ」⁴⁴ と「語頭疊用」(anaphora)⁴⁵ を用いて強調する (1:5b-6a)。また、「疑う人」は「直喩」(eikasia; similitudo)⁴⁶ を用いて海の波に譬えられ、この世への欲望に捉われた「二心」(dipsykos) の者であり、彼らは「(人生の) 全ての道において」「安定がない・制御できない」(akatastatos) という多義的な「隠喩」(metaphora; translatio)⁴⁷ を用いて表現する (1:8)。⁴⁸ こうして、「信仰の試練」の一つの側面である「言葉」と「心」の問題、すなわち「舌と心」の問題 (3:1-12, 4:1-10, 4:11-12) とそれに対して「神の知恵を求めること」(3:13-18) が前もって示される (1:6b-8)。

続いて、「低められている人 (貧しい人)」(cf. 4:6, 10) は高められる時に「誇り」、それと「対置」して「富んでいる人」は低められる時に「誇りなさい」と勧める (1:9-10a)。「富んでいる人」は、「直喩」を用いて枯れて散る草花に譬えられ、⁴⁹ 消え去ることが示される (1:10b-11)。こうして「信仰の試練」のもう一つの側面である行為の問題、すなわち「貧しい人」と「富んでいる人」の問題 (2:1-26, 4:1-5:6) への導入がなされる。

C. 命題 (propositio; 1:12-18, 19-25, 26-27)

(1) 第一命題「試練に耐える人は幸いである」(1:12-18)

「命題」(propositio)⁵⁰ では議論のテーマを前もって示す。第一段落 (1:12-18) では、「試練に耐え忍ぶ人は幸いである」(1:12, cf. 5:11)、そのような人は「命の冠」を受けるであろう、とヤコブ書の修辭的状況に対して総論として「命題」を述べる (1:12)。そこでは、「私は神から誘惑される」(1:13a) と主張する論敵の立場を否定して、「各々自分の欲望から誘惑される」(1:14) という立場を「対置」する。さらに、「欲望がはらんで罪を生み、罪が熟して死を生む」(1:15) と「前辞反復」を用いて二つの文を「並置」(pariosis; isocolon)⁵¹ する。こうして「試練」と「忍耐」による「命の冠」(1:12) と「欲望」と「罪」による「死」(1:15) を「対置」する。

さらに、「思い違いをしてはいけない」(1:16) という強い警句を導入して、「神は悪から誘惑を受けることはなく、また誰をも誘惑されることはない」(1:13b) という「頭語疊用」による主張を補って「すべての良い贈り物、すべての完全な賜物は、上より光の御父から降りてくる」(1:17) という「頭語疊用」を用いて強調する (cf. 3:13-18)。また、「罪が熟して死を生む」(1:15b) に「対置」して、「(御父は) 真理の言

葉によって私たちを生んだ」(1:18; cf.1:21b)と強調する。こうして、「命」か「死」か、えられた神の言葉に対する「信仰」が試されているのである。

(2) 第二命題「行なう人は幸いである」(1:19-25, 26-27)

第二段落では、「行なう人は幸いである」とヤコブ書の修辞学的状況に対して具体的な「命題」を述べる(1:25c)。第一段落の「幸いである」の命題が段落の冒頭に示されるのと対比して、長い文の始めに出てきた言葉を最後に繰り返す「隔語反復」(epanalepsis; redditio)⁵²の用法を援用して、第二段落の「幸いである」の「命題」は段落の末尾に現れる。

まず「すべての人は聞くに早く、語るに遅く、怒るに遅くありなさい」(1:19)と格言を語り、「人の怒り(orge)」⁵³は「神の義」⁵⁴を行なうことができないからである」(1:19)と述べて、「(魂に)植えられた御言葉を受け入れなさい」(1:21b; cf.1:18)と勧める。次に「御言葉を聞くだけで自分自身を偽る人でなく、行なう人になりなさい」(1:22)と勧め、論敵を想定した「聞くだけで行なわない人」は、鏡を見て離れると自分の生まれつきの顔を忘れる人に譬えられ(1:23-24)、それと「対置」して「完全な自由の律法」⁵⁵を見つめて留まる人は「行いをする人」であると鏡を比喻に用いて、隣人愛を「行なう人」の「幸い」を述べる(1:25ab)。

さらに、「幸いである」の具体的な内容は二つに分かれる。「もし誰かが」という導入句で論敵を想定した「舌を制御せず、心を偽る、その名に値しない宗教」(1:26)と「孤児とやもめに配慮し、自分をこの世から分かち保つ、清く純粋な宗教」(1:27)を、文末と文頭で「宗教」を繰り返す「前辞反復」によって、二種類の「宗教」として「対置」する。こうして、第一に、「舌を制御しない」言葉の問題(3:1-12, 4:11-12)と「心を偽る」快楽・欲望の問題(4:1-10)、第二に「孤児とやもめ」に象徴される「貧しい人」と「富んでいる人」の問題(2:1-13, 4:13-5:6)に対して、「行ない」が問われる(2:14-26, 3:13-18)。以下では、これらの第一と第二の問題が「キアスム」(chiasmos)を用いて順序を入れ替えて論じられる。

D. 第一議論:「富んでいる人」の問題(argumentatio prima;2:1-13,14-26)

(1) 「人を偏り見ない」(2:1-13)

「さまざまな種類の信仰の試練」の一つとして、冒頭で「人を偏り見

る信仰を持たないように」と勧めて、「富んでいる人」と「貧しい人」の問題の「命題」とする(2:1)。その具体的な「範例」(paradeigma; exemplum)⁵⁶として眼前に彷彿と情景を描き出す「鮮明な描写」(ergasia; operatio)⁵⁷と直接話法を用いて、会堂の来会者の富んでいる人と貧しい人に対して、一方にはよい座席に座らせ、他方には立つか自分の足元に座るように「対置」的に指示する。それに対して「あなたがたの中で差別的に判断して、裁く人になったのではないか」と「修辞疑問」(erotema; interrogatio)⁵⁸を用いて非難する(2:2-4)。

そして、「議論」で「神は信仰に富ませて神の国を受け継がせるために世の貧しい人々を選ばれたのではないか」(2:5)⁵⁹と論じて、「あなたがたは貧しい人を辱めた」と非難し、「富んでいる人々」によって抑圧され、裁判所に連行され、御名を汚されたことを「修辞疑問」で指摘する(2:6-7)。その「論拠」(semeion; signum)⁶⁰としてレビ記19章18節の隣人愛の文を引用し、「最も尊い(王の)律法」を守るならば、それを「行なう」ようにと勧める(2:8)。また、もし人を偏り見るならば、それは罪であり、律法を犯すことになる」と指摘する(2:9)。なぜならば(gar)、律法のすべてを守っても一点において罪を犯すならば、罪となるからである(2:10-11)。

このように、語り行なったことは「自由の律法」によって裁かれ、「憐れみを行なわなかった人には憐れみのない裁きが臨むが、憐れみが裁きに勝利する」と「憐れみ」を繰り返す「滞留」(epimone)⁶¹によってこの段落の議論を「結論」づける(2:12-13)。

(2) 「信仰と行為」(2:14-26)

続いて、さらに普遍化した「信仰と行為」に関して、「行ないを伴わない信仰があったとしても、それは役に立つだろうか」と議論の「命題」を「修辞疑問」で投げかける(2:14)。

その具体的な「範例」として、裸で日毎の食に事欠く人に、直接話法を用いて「安心して行きなさい、暖まりなさい、満ち足りるまで食べなさい」と言うだけで必要な物を何も与えないとしたら、「それは役に立つだろうか」とこの小段落の始めと終わりに「役に立つだろうか」を繰り返す「隔語反復」を用いて強調し(2:15-16)、「行ないの伴わない信仰は死んだものである」(2:17)と「命題」の「修辞疑問」(2:14)に対して「命」(cf. 1:12)と「死」(cf. 1:15)に関する「信仰と行為」の「結論」を導き出す。

さらに、直接話法を用いて「行ないの伴わないあなたの信仰を私に見せよ」「行ないの伴う私の信仰をあなたに見せよう」と「並置」して議論を展開し(2:18)、「あなたは神が一人であると信じているか」「悪魔も信じており、怖れおののいている」を「対置」して、「信仰」と「行ない」を「対比」して(2:19)、「行ないの伴わない信仰は怒りではないか」と「命題」の「死」(2:14)を「怒り」(cf. 1:20)に修正して、新たな「修辞疑問」を投げかける(2:20)。

「議論」ではイサクを捧げたアブラハムの出来事を「範例」として挙げて(2:21)、「信仰はその行ないと共に働いて、行ないによって信仰は完成された」(2:22)と「前辞反復」によって「行ないによって」を強調し、その「論拠」として創世記15:6を引用して(2:23)、そこから新たな「修辞疑問」(2:20)に対して「人は信仰によってのみではなく、行ないによって義とされる」という「命題」の新たな「結論」を導き出し(2:24)、「範例」としてラハブを挙げ、「同様に行ないによって義とされたではないか」と「修辞疑問」で問いかける(2:25)。

以上の議論をまとめて「霊を伴わない体が死んだものであるように、行ないを伴わない信仰は死んだものである」と「直喩」を用いて、文末で同じ語句を繰り返す「語尾音反復」(homoioteleuton; homoeoteleuton)⁶²により「死んだものである」を強調して、この小段落の議論を「結論」づける(2:26)。こうして、行ないを欠く行き過ぎた信仰義認論を批判して、行為義認論によって信仰義認論を補う。⁶³

E. 第二議論：「舌と心」の問題 (argumentatio secunda; 3:1-12, 13-18, 4:1-10, 11-12)

(1) 「舌を制御する」(3:1-12)

「さまざまな種類の信仰の試練」のもう一つの側面は「舌」(言葉)の問題である。冒頭で「教師が大きな裁きを受けると知って、あなたがた多くの人々は教師にならないように」と具体的な勧めとして「命題」を掲げる(3:1)。「皆(hapantes)多くの(polla)罪を犯す(ptaiomen)からである」と音が似た語を並べる「類音」を用いてその理由を述べる(3:2a)。また、言葉において罪を犯さない人は「完全な人であり、体全体をも制御することができる」(3:2b)とキリスト教徒の目標であるその「根拠」を述べる。

そして「議論」では、「体全体」を制御する「舌」と同様の働きをするものとして、「馬の体」と「轡」、「船体」と「舵」を挙げて「例証」し

(3:3-4)、「小さな」(mikron)と「大きな」(megala)を「対置」して「小さな器官が、大言壮語する」(3:5a)とその逸脱した働きについて指摘する。さらに、その「類比」として「いかに小さな火がいかに大きな森を燃やすことか」と「対置」して「小から大への論理」(locus a minore ad maius)⁶⁴を用いる(3:5b)。また「舌は火である」と「隠喩」を用い、「舌は悪の世界となり」、体全体を汚して、人生の諸段階を「焼き尽くし」、やがてゲヘナで「焼き尽くされる」とその逸脱した働きを生前死後と「対置」して「擬人化」して表現する(3:6)。さらに「自然」(3:7)⁶⁵は人間に制御されているが、舌を制御した人間はいないと自然と人間を「対置」して「アイロニー」(eironeia; ironia)⁶⁶を用いる(3:7-8)。

同じ舌で神を讃えて人を呪い、同じ口から讃美と呪いが出てくると「対置」して述べるが、そうあってはならないと批判する(3:9-10)。また、その「論拠」として同じ泉から甘い水と苦い水が湧かず、いちじく木からオリーブの実が生ぜず、ぶどうの木からいちじくの実は結ばず、塩水が甘い水となることはないと自然界から「範例」を挙げる(3:11-12)。

(2) 移行：「上からの知恵を求める」(transitio; 3:13-18)

「さまざまな信仰の試練」である「舌」の問題から「欲望」の問題に「移行」する間に、両者への解決として「上からの知恵」(cf. 1:5, 17)を求めることを勧める。

まず「あなたがたの中で知恵者や知者は誰か」と「修辞疑問」で問いかけ、その「知恵」を「柔和な」(cf. 1:21)⁶⁷「行ない」という「振舞」で示すことを求める(3:13)。それに「対置」して、「心」の中に「妬み(zelos)や争い(erithelia)」⁶⁸があるならば、「誇るな」(cf. 4:16)「真理に対して偽るな」(cf. 1:18, 5:19; 1:22, 26)と厳しく批判する(3:14)。「上から降りてきた知恵」と「地上のこの世の悪魔的な知恵」と二種類の「知恵」を「対置」して、それは後者であると明確に指摘する(3:15)。そして「上からの知恵」は悪徳表と「対置」して、ヘレニズムの徳目表から列挙するが(3:16-17)、とりわけ「戦いと争い」(4:1)と「対置」した「平和」を繰り返して(3:18)、次の段落に「移行」する。

(3) 「快樂に従う世の友ではなく、神に従う人になる」(4:1-10)

「舌」の問題と絡んだ「心」の問題に移り、「戦いはどこから(来るのか)。争いはどこから(来るのか)」と「前辞反復」を用い、「快樂から(来るの)ではないか」と「修辞疑問」を重ねて、その由来が「快樂

（欲望）」にあると指摘する。「欲しても持つことができれば殺し（cf.2:11）」「願っても得ることができなければ争ったり戦ったりし」と「並置」し（4:2ab）、「持てないのは求めているからであり」「求めても受け取れない⁶⁹のは間違えて求めているからである」（cf.1:5）と「対置」し、その結果「あなたがたは快樂に（時を）費やす」（4:2c-3）と批判する。それは「世の友であり、神の敵ではないか」と「修辞疑問」で「対置」し、仮定法で「快樂（欲望）」に従うのは「世の友」となり「神の敵」となると「対置」を「繰り返し」て、強調する（4:4）。

それに対して、神は「あなたがたの内に置かれた霊を妬むほどに慕い求めている」（cf.1:18, 21）と書かれているのは虚しいのかとの「修辞疑問」の問いに対して（4:5）、「神は高慢な者に対して対抗し、謙遜な者に対して恩恵を与える」という「対置」で書かれた箴言3章34節（70人訳）を「論拠」として引用し、それに反論する（4:6）。「神に従い、悪魔に対抗しなさい」と「対置」し、「神に近づきなさい、そうすれば神は近づいて下さる」と「前辞反復」を用いて勧め、「罪人たちよ（cf.5:20）、手を清めなさい（cf.1:27）」「二心の者たちよ（cf.1:8）、心を純粹にしなさい（cf.3:17）」と「対置」して、心身の清めを勧める（4:8）。「嘆きなさい。悲しみなさい。泣きなさい」と類似の語句を三つ並べ語調を強める「トリコーロン」（trikolon）⁷⁰を用いて、逆説的に「悲しみの時を笑いに、⁷¹ 憂いの時を喜びに変えなさい」と勧め（4:9）、神の前で「謙遜」（cf.1:9, 10, 4:6）になれば、神は「高めて」（cf.1:9）下さる⁷²と逆説で結ぶ（4:10）。

（4）「兄弟を裁かない」（4:11-12）

再び「心の問題」から「舌の問題」（3:1-12）に戻り、この第二議論を始めと終わりで「囲い込み」（inclusio）、⁷³ こうして第二議論を「結論」づける。すなわち、教師の舌の問題は、ここでは具体的に中傷誹謗の問題として現れる。「結論」として「互いに兄弟を中傷しないように」と勧める。その理由は「兄弟を中傷する人は、兄弟を裁く人である」と「語尾音反復」で「対置」し、「律法を中傷するならば、律法を行なう人でなく、裁く人である」と「対置」して、兄弟に対する中傷誹謗は律法に対する中傷誹謗に通じ、両者を「並置」して批判する（4:11）。すなわち律法を定め裁く方は一人であり、救い滅ぼすことができる方は一人であるのに、最後に「隣人を裁くあなたは誰か」と強い「修辞疑問」を投げかける（4:12）。

F. 第一議論再開：「富んでいる人」の問題 (repetitio argumentatio prima; 4:13-17, 5:1-6)

(1) 「富んでいる人は誇り高ぶらない」(4:13-17)

以上の「舌と心」の議論(3:1-4:12)の後で、再び「富んでいる人」の問題に戻り(2:1-13, 14-26)、第一議論を再開して第二議論を「閉い込み」、第一議論の「結論」に導く。「今聞きなさい、こう言っている人々よ」という導入句から始め、直接話法により「今日または明日この町に行って、1年間そこで働き」「(商人として)旅をして、金儲けをしよう」と「対置」で書かれた文を「並置」して、「富んでいる人」の心中を眼前に彷彿させる「鮮明な描写」で描き出す(4:13)。このような人々は明日の命をも知らないと批判し、その論拠として自然界から僅かの間現れては消えてしまう「霧」を「比喩」に用いる(4:14)。それに対して、「あなたがたはこう言うべきである」という導入語句により、直接話法を用いて「主の御心であるならば生きながらえもし、ここそこで働こう」と商人の心得を新たに「対置」する(4:15)。「しかし、今あなたがたは高慢になって誇っている」「このような誇りはすべて悪である」と「対置」して厳しく批判する(4:16)。それは「善を行なうべきことを知っていて、行なわないのは罪だからである」(4:17)と「悪」(cf. 2:4)と「善」(cf. 2:7, 3:13)を「対置」し、「悪」と「罪」(cf. 1:15, 2:9, 5:15, 16, 20)を「対置」して結論づける。

(2) 「富んでいる人の不幸」(5:1-6)

「今聞きなさい、富んでいる人々よ」という前の段落の導入句(4:13)を「頭語骨用」的に繰り返し、「来るべき悲慘について泣きわめきなさい」と最後の審判に対して警告する(5:1)。それは「富は朽ち果て、衣服は虫が付き、金銀はさび」⁷⁴と「トリコーロン」的に列挙して、これらの宝を「終末の日に積み重ねてきた」ので、それらの「毒」(cf. 3:8)が証拠となって、裁きの火によって「肉体が食い尽される」と「鮮明な描写」によって描かれる(5:2-3)。さらに、富んでいる人々の三つの罪が具体的に指摘される。第一に、刈り入れの働き人に対する未払いの「賃金は叫び」、刈り入れた人々の「叫び声は主の耳に入った」と「対置」を用いて訴える(5:4)。第二に、それと「対比」して富んでいる人々は「地上で贅沢に暮らし、快樂にふけり、居る日に心は肥え太った」と「語尾音反復」を用いて非難する。第三に、「義人を断罪し、殺害し、彼はあなたがたに抵抗しなかった」と「語尾音反復」を用いて糾弾する。

G. 結論 (peroratio; 5:7-11, 12-18, 19-20)

(1) 「試練」と「忍耐」(5:7-11)

以上の助言的勧めの議論の結論では、序論と「対比」して、第一の命題の試練に対する「忍耐」に戻り、議論全体を「囲い込む」。まず「主の来臨まで忍耐深く待ちなさい」と勧める(5:7a)。「忍耐深く待つ」(makrothymein)は「怒り」(1:19-20)と反対であり、「忍耐」(1:3, 4, 12)と同類語である。「見よ」以下では、収穫まで先の雨と後の雨を「忍耐深く待つ」農夫を「比喻」に挙げる(5:7b)。再び「頭語畳用」で「忍耐深く待ちなさい」を繰り返し、「二心」(1:7, 4:8)に対して「心を固くしなさい、主の日が近いからである」(5:8)、「(「裁かれないために」)⁷⁵「互いに不平を言わないようにしなさい、裁き主が戸の前に立っておられるからである」(5:9)と「並置」して終末の裁きを前にして厳かに勧める。「不平を言わない」は「舌」の問題の結論である「兄弟を中傷しない」(4:11-12)の婉曲的表現である。旧約聖書の「辛抱」と「忍耐深さ」の「範例」(hypodeigma)として「預言者たち」に倣うことが勧められる(5:10)、「忍耐した人々は幸い」(cf.1:12)であると「命題」を繰り返して主張し、その「範例」として「ヨブ」の忍耐を取り上げ、その「論拠」として神の慈しみと憐れみを申命記5章11節を引用する(5:11)。

(2) 「誓い」の禁止と苦しむ人の「祈り」(5:12, 13-18)

続いて、「何よりもまず」という導入句の後に、「天を指しても、地を指しても、何を指しても」と「トリコーロン」を用いて三回繰り返して、裁きを前提にして「誓ってはならない」と勧める(5:12)。⁷⁶

「誓い」の禁止と「対比」して「祈り」を勧める。「あなたがたの中で苦しんでいる人は祈りなさい、喜んでいる人は讃美しなさい、病の人は長老を呼びなさい(そして祈ってもらい、油を塗ってもらいなさい)」と「並置」する(5:13-14)。「信仰による祈りは、病を救い、もし罪を犯していれば赦され、互いに罪を告白し、互いに祈れば、癒される」と「対置」的表現を繰り返して義人の祈りの力を指摘して(5:15-16)、その「範例」として天から雨が降らないように祈り、三年半後に天から雨を降らせ地に実りをもたらせた「エリヤ」の祈りを取り上げる(5:17-18)。

(3) 「真理から迷い出た人」(5:19-20)

最後に、論敵である「真理から迷い出た人」「罪人」を連れ戻す人は、その魂を死から救い出し、罪を覆うことを知るべきであると勧める。

5. 結びに

以上の修辞学的分析をまとめると以下のようなになる。ヤコブ書は前書きを除くと極めてシンメトリーの構造をしている。序論では「信仰の試練」として「舌と心」の問題と「富んでいる人」の問題が指摘され、「命題」では第一命題「試練に耐える人は幸いである」と第二命題「行なう人は幸いである」という二つを掲げ、後者は「舌と心」の問題と「富んでいる人」の問題とであることが示される。本論の第一議論では、「命題」の第二命題の順序を「キアスム」を用いて入れ替え、第一議論で「富んでいる人」の問題が議論され、第二議論で「舌と心」の問題が論じられる。後者はさらに「舌」の問題を論じた後に議論の「移行」を経て「心」の問題に移り、「舌」の問題に戻って「囲い込み」、「結論」する。その後に第一議論の「富んでいる人」の問題に戻り、こうして第一議論が第二議論を「囲い込む」。そして、「結論」では第一命題に戻って議論の全体を「囲い込み」、議論全体を結ぶ。このようにヤコブ書全体は「上からの知恵を求める」(3:13-18)を中心にして鏡像的シンメトリー構造をしている。

このような本論の議論は、「修辞疑問」や直接話法を用いて「ディアトリベー」のスタイルで議論されていく。このような議論の中で論敵に反論して助言するために、「対置」や「並置」が頻繁に用いられ、「頭語畳用」「前辞反復」「語尾音反復」「隔語反復」「トリコーロン」「類音」「滞留」「範例」「直喩」「隠喩」「鮮明な描写」「小から大への論理」「アイロニー」という修辞法が夥しく用いられる。

さらに議論を「例証」する「論拠」として、旧約聖書やQ文書からの言葉が用いられ、「範例」として自然界や日常生活からの「比喩」が取り上げられる。こうして、ヤコブ書は修辞学的状況に対して極めて修辞学的に構成された議論を展開して説得的に助言する、一つの説教なのである。

* 本稿は、2007-2010年度の科学研究費基盤研究C「新約聖書におけるヘレニズム・ユダヤ人キリスト教書簡文学の修辞学的研究」の一つの成果である。

1 1999年から2002年に発表した第二コリント書の修辞学的分析の拙い4つの論文は、現在では山田耕太『新約聖書と修辞学』キリスト教図書出版社(2008年)に所収。その後の論文は「ガラテア書の修辞学的分析：プロギュムナスマタの視点から見て(1)」『敬和学園大学研究紀要』第13号(2004年)所収、「ガラテア書の修辞学的分析：プロギュムナスマタの視点から見て(2)」『新約学研究』第32号(2004年)所収、「フィリピ書の修辞学的分析：演示弁論の視点から見た文学的問題(1)」『敬和学園大学研究紀要』第14号(2005年)所収、「フィリピ書の修辞学

- 的分析：演示弁論の視点から見た文学的問題（２）」『新約学研究』第33号（2005年）所収、「第一コリント書1-4章の修辞学的分析：神義論としてのアイロニー（１）」『敬和学園大学研究紀要』第15号（2006年）所収、「第一コリント書1-4章の修辞学的分析：神義論としてのアイロニー（２）」『敬和学園大学研究紀要』第16号（2007年）所収、「ローマ書の修辞学的分析」『新約学研究』第36号（2008年）所収，“Is Romans as an Ambassadorial Letter?: A Response to Prof. Jewett’s *Romans*” 日本聖書学研究所シンポジウム“Paul, Romans and Japan” 発表、2008年4月。
- 2 拙論「ギリシア・ローマ時代におけるリベラル・アーツ教育と修辞学」『敬和学園大学研究紀要』第17号（2008年）所収、「フィロンにおけるパイディア」『敬和学園大学人文社会科学研究所年報』第7号（2009年）所収、「フィロンにおける修辞学」『新約学研究』第37号（2009年）所収、「フィロンにおける哲学」『ペディラヴィウム』次号（2011年）掲載予定。さらに、福音書と書簡のジャンルを修辞学的視点から評価し直した研究史については、拙論「福音書は伝記文学か？」『経験としての聖書：大貫隆教授献呈論文集』日本聖書学研究所（リトン社、2009年）所収、「新約聖書の書簡文学」『敬和学園大学研究紀要』第19号（2010年）、所収。
 - 3 拙論「ヘブライ書の修辞学的分析」『新約学研究』第38号（2010年）所収。
 - 4 A. Meyer, *Das Rätsel des Jakobusbriefes*, Giessen: Töpelmann, 1930.
 - 5 M. Dibelius, *Der Brief des Jakobus*, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1921 (3.Aufl.), = ET, *James: A Commentary on the Epistle of James* (11th revised edition prepared by H. Greeven), Philadelphia: Fortress, 1975; 1:2-18, 1:19-27, 2:1-13, 2:14-26, 3:1-12, 3:13-4:12, 4:13-5:6, 5:7-20: cf. L. G. Perdue, “Paraenesis and the Epistle of James,” *ZNW* 72 (1981), 241-256; cf. K. Berger, “Hellenistische Gattungen im Neuen Testament,” *ANRW* 2. 25.2, 1034-1432, Zweiter Teil, I, 3. “Paränese (Mahnrede) und *exhortatio*,” 1075-1077. W. Schrage, *Der Jakobusbrief*, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1973, 6-7; W. G. Kümmel, *Einleitung in das Neue Testament*, Heidelberg: Quelle & Meyer, (17. Aufl.) 1973 = ET, *Introduction to the New Testament*, London: SCM Press, 1975, 407-409.
 - 6 Ph. Carrington, *The Primitive Christian Catechism*, Cambridge: Cambridge Univ. Press, 1940.
 - 7 D. Daube, *The New Testament and Rabbinic Judaism*, London, 1956, 113-137.
 - 8 H. Windisch, *Die katholischen Briefe*, Mohr, 1930, 4; F. Mussner, *Der Jakobusbrief*, Freiburg: Herder, 24.
 - 9 E. Lohse, “Glaube und Werke zur Theologie des Jakobusbriefes,” idem, *Die Einheit des Neuen Testaments*, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1973, 285-306, 301.
 - 10 G. Strecker, *Literaturgeschichte des Neuen Testaments*, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1992, 72.
 - 11 R. J. Bauckham, *James*, London: Routledge, 1999, 25-28; H. Frankemölle, *Der Brief des Jakobus*, Würzburg, Gütersloher Verlagshaus & Echter Verlag, 1994, 64-71; M. Tsuji, *Glaube zwischen Vollkommenheit und Verweltlichung*, Tübingen: Mohr Siebeck, 1997; K. W. Niebuhr, “Der Jakobusbrief im Licht frühjüdischer Diasporabriefe,” *NTS* 44 (1998), 420-443; Chr. Burchard, *Der Jakobusbrief*, Tübingen: Mohr Siebeck, 2000, 9; 辻学『ヤコブの手紙』新教出版社、2002年、19-26; cf. I. Taatz, *Frühjüdischer Briefe: Die paulinischen Briefe im Rahmen der*

- offiziellen religiösen Briefe des Frühjudentums*, Schweiz: Universitätsverlag Freiburg / Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1991.
- 12 U. Schnell, *Einleitung in das Neue Testament*, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, (4.Aufl.) 2002, 438.
 - 13 Cf. K. Berger, "Predigt," *ANRW* 2.25.2, 1363-1371.
 - 14 U. von Wilamowitz-Moellendorff, *Antigonos von Karystos*, "Exkurs 3, Der kynische Prediger Teles," Berlin: Weidmann, 1881, 292-319; E. Norden, *Agnostos Theos: Untersuchungen zur Formengeschichte religiöser Rede*, Leipzig/Berlin: Teubner, 1913; cf. K. Berger, "Diatriben und Dialektik," *ANRW* 2.25.2, 1124-1132.
 - 15 J. Geffcken, *Kynika und Verwandtes*, Heidelberg: Quelle & Meyer, 1909; 3:1-11; P. Wendland, *Die hellenistisch-römische Kultur / Die urchristlichen Literaturformen*, Tübingen: Mohr, 1912, 370-372; J. H. Ropes, *A Critical and Exegetical Commentary on the Epistle of St. James*, Edinburgh, 1916, 6-18; 2:1-13, 14-26, 3:1-11.
 - 16 R. Bultmann, *Der Stil der paulinischen Predigt und die kynisch-stoische Diatribe*, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1910. Cf. S. K. Stowers, *The Diatribe and Paul's Letter to Romans*, Chico: Scholars Press, 1981; C. Song, *Reading Romans as a Diatribe*, New York: Peter Lang, 2004.
 - 17 H. Thyen, *Der Stil der Jüdisch-Hellenistischen Homilie*, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1955. Cf. E. Norden, *Die Antike Kunstprosa vom VI. Jahrhundert v. Chr. Bis in die Zeit der Renaissance*, Zweiter Band, Leipzig & Berlin: Teubner, 1909 (1.Aufl. 1898) = Stuttgart: Teubner, 1983, "2. Der verschiedenen Gattungen der Predigt," 537-545; F. Siegert, *Drei Hellenistisch-jüdische Predigten*, Tübingen: Mohr Siebeck, 1980; idem, *Drei Hellenistisch-jüdische Predigten II*, Tübingen: Mohr Siebeck, 1992, bes.3-12.
 - 18 B. Reicke, *The Epistle of James, Peter and Jude*, New York: Doubleday, 1964, xxxi-xxxii, 3-4.
 - 19 B. Witherington III, "James the Homily," idem, *Letters and Homilies for Jewish Christians: A Socio-Rhetorical Commentary on Hebrews, James and Jude*, Downers Grove / Nottingham: Intervarsity Press, 2007, 383-555, esp. 388-393.
 - 20 Cf. D. F. Watson, "An Assessment of the Rhetoric and Rhetorical Analysis of the Letter of James," R. L. Webb & J. S. Kloppenborg, *Reading James with New Eyes: Methodological Reassessments of the Letter of James*, London/New York: T&T Clark International, 2007, 99-120.
 - 21 W. Wuellner, "Der Jakobusbrief im Licht der Rhetorik und Textpragmatik," *Linguistica Biblica* 43 (1978), 5-66.
 - 22 E. Baasland, "Literarische Form, Thematik und geschichtliche Einordnung des Jakobusbriefes," *ANRW* 2.25.2, 3646-3684.
 - 23 J. H. Elliott, "The Epistle of James in Rhetorical and Social Scientific Perspective: Holiness-Wholeness and Patterns of Reduplication," *Biblical Theological Bulletin* 23 (1993), 71-81.
 - 24 L. Thurén, "Risky Rhetoric in James?" *Novum Testamentum* 37 (1995), 262-284; idem, "
 - 25 議論の展開でいち早く修辞学的分析が試みられたのは、ヤコブ書2、3章である。Cf. J. D. N. Van der Westhuizen, "Stylistic Techniques and Their Functions

- in James 2:14-26," *Neotestamentica* 25 (1991), 89-107; D. F. Watson, "James 2 in Light of Greco-Roman Scheme of Argumentation," *NTS* 39 (1993), 94-121; D. F. Watson, "The Rhetoric of James 3:1-12 and a Classical Pattern of Argumentation," *Novum Testamentum* 35 (1993), 48-64.
- 26 1:2, 2:1, 14, 3:1, 10, 12, 5:12, 19.
- 27 1:16, 19, 2:5.
- 28 4:11, 5:7, 9, 10.
- 29 2:4, 5, 6, 7, 14 (dis), 16, 20, 21, 25, 3:13, 4:1 (dis), 4, 12.
- 30 「もし誰かが」 (ei tis) 1:5, 23, 26, (ean tis) 2:15; 「もし」 (ei) 2:8, 9, 11, 3:2, 3, 14, 4:11; (ean) 2:2, 14, 4:14, 15, 5:19.
- 31 1:5, 7, 18, 23, 26, 2:14, 16, 18, 3:2, 5:12, 13 (dis), 14, 19 (dis).
- 32 「あなたは」 2:3 (dis), 18, 19, 4:12; 「あなたがたは」 2:6, 5:8.
- 33 Cf. I ペトロ 1:1 「ポント、ガラテヤ、カッパドキア、アジア、ビテニアの離散した仮住まいの選ばれた者たちへ」、参照。
- 34 *Rhet. Her.* 4.29; Quintilian, 9.3.66; Lausberg, §637.
- 35 *Rhet. Her.* 1.6-11; Cicero, *Inv.* 1. 20-26; Quintilian, 4.1; Anon. Seguerianus, 1-39; Apsines, 249.15-260.16.
- 36 Anon. Seguerianus, 10-11; cf. Pernot, *La Rhétorique*, 305-306.
- 37 「さまざまな種類の試み」と「忍耐」「迫害」「喜び」というモチーフについて、I ペトロ 1:6-7, 4:12-13 (cf. Q6:22-23)、参照。
- 38 ヤコブ書のキリスト教徒の目標としての神的な「完全（成人性）」については、「上よりの完全な賜物」（1:17）、「完全な律法」（1:25）、「完全な人（成人）」（3:2）、「業（行ない）によって信仰は完成する（完全となる）」（2:22）、参照。
- 39 Cf. ローマ 5:3-5:「苦難」（thlipsis）は忍耐を生み、忍耐は「練達」（dokime）を生み、練達は希望を生む」。
- 40 Quintilian, 9.3.44; Lausberg, §§619-622.
- 41 I ペトロ 1:6-7, 2:20, 参照。
- 42 フィロンの「アパイディア」「プロパイディア」「パイディア」に対応する「初学者」「学習者」「知恵者」ならびに「地の人間」「天の人間」「神の人間」との関係で、ヤコブ書の「試練」を受けているキリスト教徒はモーセに代表される「神の人間」である「成人（完全な者）」（teleioi）「知恵者」（sophoi）を目指しているアブラハムに代表される「天の人間」である「学習者」に位置づけられる、山田耕太「フィロンにおけるパイディア」、参照。
- 43 *Rhet. Her.* 4.15.21; Quintilian, 9.3.81-86.; Lausberg, §787.
- 44 「求めよ」「与えられる」（1:5）は Q11:9 に由来する。ヤコブ書と Q、とりわけ山上の説教との関係は、注 37, 59, 69, 71, 72, 74, 75, 76, 参照。Cf. P. J. Hartin, *James and the 'Q' Sayings of Jesus*, Sheffield: Sheffield Academic Press, 1991; J. S. Kloppenborg, "The Emulation of the Jesus Tradition in the Letter of James," R. L. Webb & J. S. Kloppenborg (ed.), *Reading James with New Eyes*, 121-150.
- 45 *Rhet. Her.* 4.19; Quintilian, 9.3.30-34; Lausberg, §§629-630
- 46 Lausberg, §§843-847.
- 47 Lausberg, §558.
- 48 「欲望」に満ちた「二心」の「疑う人」は、フィロンのニムロデに代表される「地の人間」である「初学者」に位置づけられる、山田耕太「フィロンにおけるパイデ

- イア」、参照。
- 49 詩篇102:4、イザヤ40:6-7、Iペトロ1:24、参照。
- 50 *Rhet. Her.* 2.28; Quintilian, 4.4; Anon. Seguerianus, 161-163.
- 51 *Rhet. Alex.* 27-28; *Rhet. Her.* 4.20.27-28; Quintilian, 9.3.76; Lausberg, §719.
- 52 Quintilian, 9.3.34; Lausberg, §625.
- 53 「怒り」(orge)は「妬みと争い」(3:14)と結びつき人間の自然の状態を表わす(ガラテヤ5:20、参照)。
- 54 新約聖書で「神の義」が用いられているのはパウロ書簡とヤコブ書のみ(フィリピ3:9, IIコリント5:21, ローマ1:17, 3:21, 22, 25, 26, 10:3、参照)。「義とされる」(2:25)、参照。
- 55 「完全な自由の律法」とは「憐れみ」(2:13, 3:17)や「柔和」(1:21, 3:13)などと密接に結びついた「隣人愛」を指す(2:8, 12)。新約聖書で「自由」が用いられているのはパウロ書簡とIペトロ書とヤコブ書のみ(Iコリント10:29, IIコリント8:17, ローマ8:21, Iペトロ2:16, IIペトロ2:19、参照)
- 56 Aristotle, *Rhet.* 1.2.13; Quintilian, 5.11; Apsines, 8; Lausberg, §410-414.
- 57 Hermogenes, *Prog.* 4.26; Lausberg, §875.
- 58 Quintilian, 9.2.8; Lausberg, §§767-770.
- 59 Iコリント1:27-28, Q6:20b. /
- 60 Quintilian, 5.9.1, 5.9.9; Lausberg, §§358-365.
- 61 Lausberg, §838.
- 62 *Rhet. Her.* 4.28; Quintilian, 9.3.77; Lausberg, §§725-728.
- 63 ヤコブ書はパウロ書簡の議論を前提にしている。注39, 53, 54, 55, 59, 65, 67, 68, 参照。
- 64 Lausberg, §397.
- 65 「自然」から学ぶというストア派の影響は、パウロ書簡(ローマ1:26, Iコリント11:24)にも見られる。フィロンにおけるストア派の影響などは、山田耕太「フィロンの哲学」、参照。自然や自然に即した日常生活からの比喻は、ヤコブ1:6, 10-11, 23-24, 3:3-4, 5b, 7, 11-12, 4:14b, 5:7, 参照; ローマ11:24, 比較。
- 66 *Rhet. Her.* 4.46; Quintilian, 8.6.54; Lausberg, §§582-585.
- 67 ストア学派からヘレニズム・ユダヤ教を経てパウロによって導入されたヘレニズムの徳目表、特にガラテヤ5:23、参照。
- 68 ストア学派からヘレニズム・ユダヤ教を経てパウロによって導入されたヘレニズムの悪徳表、特にIコリント3:3, ローマ13:13 (zelos, eris); IIコリント12:20, ガラテヤ5:20 (eris, zelos, thumos, erithia)、参照。
- 69 Q11:9.
- 70 *Rhet. Her.* 4.26; Quintilian, 9.3.77; Lausberg, §733.
- 71 Q6:21b.
- 72 Q14:11
- 73 Lausberg, §625.
- 74 Cf. Q12:33.
- 75 Q6:37.
- 76 マタイ5:33-37.